

# 播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖  
☎079(435)5000



▲松のあるところが砲台跡（昭和55年ごろ）

## エピソード 弐

## オダイバと呼ばれた古宮砲台<sup>ほうだい</sup>

4月号では、江戸時代の安定したころの朝鮮通信使のエピソードを取り上げましたが、今回は、不安定な幕末期の砲台のお話です。

砲台は、大砲などの火器を設置するための台座です。土地を整地した簡単なものから、防衛上の重要地点や交通の要衝では石組みのものが造られています。設置された大砲は、移動する軍艦に命中させるため、砲身の長いカノン砲が多く設置されています。

江戸時代も終わりごろになると、鎖国をしていた日本に対して、ロシアやアメリカなどの異国船が、通商を求めて日本近海に頻繁に現れるようになりました。そのため、幕府は海岸に大砲を備え、防備を嚴重にしました。このころになると、異国船を撃退して、これまでの平和を維持するのか、外国との摩擦を避けて開国し、安定と富国強兵をめざすのかなど、さまざまな考えが渦巻いていました。

文政8（1825）年、幕府は、外国船打払令を出し、あくまで鎖国を守ろうとしました。姫路藩でも、幕府の命により、嘉永3（1850）年に家島と室津に

砲台を築きました。黒船が江戸湾浦賀（神奈川県横須賀市浦賀）に来航した翌年の安政元年（1854）年9月15日には、ロシア使節団のプチャーチンが天保山沖（大阪港）に現れました。そのため、9月22日には、代官 中村五右衛門が兵を率いて古宮で警備にあたり、下田港へ向けて出航する10月3日まで警戒していました。

文久3（1863）年には、飾磨をはじめ福泊（的形）、高砂、古宮にも砲台場が築かれました。古宮の砲台場は、姫路藩の東の端に位置しており、大阪湾から姫路領沿岸に近づこうとする異国船に対し大砲で威嚇する一方、姫路藩に急を知らせるために設置されたものでした。三門の大砲を備え、藩士に守らせていたようですが、砲撃したという記録は残っていません。

幕末のころ、現在の砲台は「台場<sup>だいば</sup>」と呼ばれ、明治になってから「砲台」と呼ぶようになりました。東京の「お台場」は、その名が残ったものです。お台場という呼び方は、幕府に敬意を払って台場に御をつけた呼び名ですが、「古宮砲台」も、当時「オダイバ」と呼ばれていました。